

高山の文化を高めた人々

31

明治生まれのナチュラリスト

老田 敬吉

老田 正夫

悼の言葉を寄せてくださった。『恩師川口孫次郎先生の思い出』によると「大正四年十月、私の斐太中学一年生の時である。戒能義重校長が転勤される事になって、その後任として川口孫次郎先生が就任される事になった。この話を耳にした私は小躍りしてよろこんだ。それは先生が当時有名な野鳥の研究家である事を知っていたからである」

子供の頃から腕白で生き物が好きだった父は、屋根に雀が巣をかけると目ざとく見つけ、巣を取ってきては子雀を育て喜んでいたそうである。

校長先生の歓迎会から帰った父親の宗左衛門は「今度の校長先生は鳥の研究で有名な先生じゃそうな、お前もそれだけ鳥が好きなら、いっそ学校

なんか止めてしまつて、先生に頼んで弟子にでも使つてもらえ、そのほうがお前もええし、俺も心配がのうて楽だし

な」腕白小僧に手を焼いていた親は冗談とも本当ともつかぬ態度でわが子に話した。

川口校長は修身の時間に自然の大切さを話され、この地方の自然について作文を提出する宿題が出された。父は野鳥の四十雀の生態について、巣の位置、卵の数、孵化までの日数など知る限りの事を詳細に書いて提出した。今では野鳥図鑑を見れば、その鳥の習性や繁殖状況がわかるが、当時はそのような基礎調査があまり出来ていなかった。

川口校長は父を校長室に呼んで、生態観察の必要性を話された後「君はまだ中学一年生である事を忘れないように、第一に学校の勉強に励み、その余暇を見て野鳥の観察を楽

しむように」と諭された。父の晩年は城山公園から日枝神社の森を双眼鏡を持って散策するのが日課になっていた。この一帯は日本有数のオシドリの繁殖地で、長年の観察の結果、それまで解明されていなかったオシドリの雛の巣立ちについて新しい事実を観察して発表し学会の注目を浴びた。

高山市文化協会から昭和二十九年に顕彰をいただいた時には「ありがたい世の中になった、昔は道楽といったのが今は文化という言葉に変わった」と喜んでいた。

父の業績は全集『日本野鳥



記』に『飛騨の鳥雑話』として収められている。

昭和四十七年一月、七十一歳で生涯を閉じた。